
【特集】環境アーカイブズ所蔵資料の整理と活用

特集にあたって

清水 善仁

法政大学サステナビリティ研究教育機構（2009年8月～2013年3月）のプロジェクトとして「環境アーカイブズ」が組織されてから7年が経過した。この間、同機構の閉鎖にともない環境アーカイブズは大原社会問題研究所に統合されたが、一貫して資料の整理・公開をおこなうとともに、様々な活動を展開してきた。大学が「環境」という対象あるいは概念に限定してアーカイブズ活動を展開する試みはこれまでにほぼ例がなく、関係者のなかには資料の収集等の点で当初不安もあったようだが⁽¹⁾、資料の整理・公開や各種の広報活動等によって、近年では書籍や新聞等にも取り上げられている⁽²⁾。まさに大学における環境分野のアーカイブズの「フロントランナー」として、今後とも堅実かつ幅広い活動が求められている。

ところで、そのような環境アーカイブズについては、これまでもアーカイブズ活動や所蔵資料の整理にかかわる論考が発表されているが⁽³⁾、いまだ検討すべき課題は少なくない。例えば、環境分野のアーカイブズ資料が有する特性、それに応じた資料整理や公開の方法、あるいは大学その他への普及啓発の在り方、資料所蔵者との関係構築のための方策等の点が挙げられる。そうした諸課題について考察を深め、その認識を広く共有することもまた、「フロントランナー」の役割の一つではないかと思う。そこで本号の特集では、「環境アーカイブズ所蔵資料の整理と活用」と題し、近年の環境アーカイブズにおける資料の整理や活用にかかる課題を取り上げ、環境アーカイブズ資料の特性やその整理の在り方、あるいは資料の活用方法等について考察を試みたい。

では、本特集に所収された論文の概要を紹介する。まず、清水善仁「日本のアーカイブズ界における「環境アーカイブズ」の位置」では、環境アーカイブズのこれまでの活動の振り返りがなされ、その存在意義と課題が検討される。以下に続く各論文の前提となる議論として位置づけられる。

(1) サステナビリティ研究教育機構の機構長を務めた船橋晴俊は、「サス研の発足のとき、今から2年ほど前に、アーカイブズをやってみようと思ったときには、果たしてサス研で立ち上げて資料が集まってくるのか、倉庫があって空のまま何カ月も過ぎていくのではないかという心配をしました。しかし、結果的にはまったく逆の事態になりまして、こんな大事な問題のこんな資料があるのかと思うものが続々と集まってきています。」（『第23回サス研フォーラム講演記録集（23）環境アーカイブズ資料公開室オープン記念シンポジウム 現代における環境アーカイブズの社会的意義と役割』31ページ）と述べている。

(2) 松岡資明『アーカイブズが社会を変える——公文書管理法と情報革命』（平凡社新書、2011年）、「「薬害の原点」忘れない」（2016年1月13日付読売新聞夕刊）、TBSテレビ「NEWS23」（2016年1月21日放映）。

(3) 金慶南「東日本大震災における「震災・原発」の記録化事例研究——法政大学「環境アーカイブズ」の活動を中心に——」（『アーカイブズ学研究』第17号、2012年）、橋本陽「個人文書の編成——環境アーカイブズ所蔵サリドマイド関連資料の編成事例——」（『レコード・マネジメント』第66号、2014年）。

西田善行「環境・原発問題をめぐる映像資料整理の意義と課題——環境アーカイブズの視聴覚資料から——」は、環境アーカイブズでの映像資料整理の経験をふまえて、映像資料のアーカイブ化をめぐる意義と課題について考察したものである。映像資料の多様性や市民運動における映像資料の意味について述べつつ、映像資料の整理におけるいくつかの課題を指摘する。映像資料あるいは映像アーカイブの問題は、近年、アーカイブズ学のみならず社会学の分野でも取り上げられており⁽⁴⁾、今後の研究の進展が期待されるテーマである。

野口由里子「アーカイブズにおけるミニコミ資料利用の展開の可能性——ミニコミ資料「ブーゲンビリア」の事例分析から——」は、環境アーカイブズで所蔵しているミニコミ資料群（東京都立多摩社会教育会館旧市民活動サービスコーナー所蔵資料）の整理を通して考察したものである。まず「ミニコミ」の歴史を概観した後、環境アーカイブズにおける同資料群の整理の実際や、整理を通してみられた資料の特徴等が述べられ、最後にミニコミ資料の利用事例として、「ブーゲンビリア」というミニコミ資料を素材に社会的な考察を加えている。アーカイブズの現場においては、ミニコミ資料の収集・整理・公開が様々な組織でおこなわれており⁽⁵⁾、「ミニコミ」という資料、ひいては市民活動全般にかかわる資料をアーカイブズとしてどのように把握し管理すべきかが課題となっていることから、時宜に合ったテーマといえよう⁽⁶⁾。

いずれも、環境アーカイブズでリサーチ・アシスタント（RA）として日々資料と向き合ってきた研究者が、資料の整理や分析を通して考察した研究の成果である。これらの論考を通して、環境アーカイブズが拓く多様な研究の可能性を感じ取っていただければ幸いである。

（しみず・よしひと 法政大学大原社会問題研究所准教授）

(4) 最近では、『社会学評論』第65巻第4号（2015年、日本社会学会）における「特集・映像アーカイブズを利用した質的調査の探求」や、『社会政策』第7巻第3号（2016年、社会政策学会）における「小特集・調査研究における映像資料利用の可能性と課題」が挙げられる。

(5) 立教大学共生社会研究センター（<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/RCCCS/>、参照2016-05-01）、市民アーカイブ多摩（<http://www.c-archive.jp/>、参照2016-05-01）等が挙げられる。

(6) この問題については、日本アーカイブズ学会が2014年度の第1回研究集会を「市民活動とアーカイブズ」として開催し、上記の立教大学共生社会研究センターおよび市民アーカイブ多摩の事例が報告された。当日の報告は『アーカイブズ学研究』第22号（2015年）に論文として掲載され、コメントと参加記が付されている。